

《書 評》

David Frankfurter, *Religion in Roman Egypt:
Assimilation and Resistance.*

(Princeton University Press, Princeton, 1998, xvi+314頁)

中 道 嵩 行

1

古代末期の宗教、とりわけキリスト教化の問題は、近年ではP.Brownの研究を代表に議論が活発な領域である。この議論に一石を投じる本書は、ローマン・エジプトの宗教史研究者としてニューハンプシャー大学で教鞭をとるD.Frankfurterにより1998年に上梓された。本書に対する学界の強い関心は、これまでに数多くの書評が寄せられ、1999年にはアメリカ宗教アカデミーの宗教史研究に関する賞を獲得したことからも明らかである。その方法論上の独自性は、エジプトの膨大な考古学的史料と人類学の理論を活用する事で、ミクロなレベルから宗教・社会生活の再現を試みている点にある。このような方法論によって立った上で、「異教の黄昏」と「キリスト教の勝利」といった古代末期の宗教理解を覆すことと、歴史分析に有効な「宗教」の定義の見直しを行うことが本書の狙いである。

本書は序論と7章の本論から構成されている。本書評では、まずその内容を概括した上で、若干の論評を試みたい。

2

序論では、4世紀のローマ軍営地から出土した武装ホルス神像が紹介されている。この伝統的な守護神像は、同時に皇帝を象徴する機能をも有しているのだが、後にはコプト教の騎馬聖人像にも影響を与える。つまり、後代においてもホルス神像の持つ伝統宗教の様式や機能といった実践的意味が、表面上形を変えながらも生き続けていることを示している。ここでは本書の主題が縮図的に示されているのである。

第1章Scope and Methodで、著者は本書全体の分析視座と目的を表明する。著者は、ローマン・エジプトの宗教はローカルな領域における日常的要請（豊作、健康祈願等）のネゴシエーションの集積であり、イデオロギーよりもむしろ、ローカルな宗教、文化慣行とより高次の信条体系とを橋渡しする中間体となる表現様式＝「イディオム」にこそ理解の

鍵がある、とする。イディオムは現地の宗教慣行の持続性を支持しており、ヘレニズムやキリスト教による新たなイデオロギーとイディオムの導入過程を見るには、再解釈、現地化を通じた複雑なプロセスの考察を要する。

伝統宗教の衰退とキリスト教の勝利というモチーフに関する著者の反論は以下の通りである。これは教会史家、ローマ史家が反復してきた、「いかにしてキリスト教に到達したか」という目的論的な誤った問題設定に起因している。伝統宗教のローカルの、私的領域への分離傾向が強まったという事実はあるが、それは直ちに衰退を意味するとは言えない。3世紀の神殿の経済的衰退は、ローカルな予言者の登場、宗教実践の中心の村社会や家庭への移行によって補完される。さらに、5世紀以降の皇帝による異教迫害は象徴的なものとどまったため、いずれも衰退の決定的根拠とは成り得ない。

また、このような伝統的宗教慣行の持続性を単なる「残存」として捉えるのではなく、宗教慣行を組織化する民衆信仰の動的側面を理解する必要がある。この点において、著者は自らコプト教をキリスト教の現地化した形態と見るエジプト学者の側に与すると明言している。キリスト教化の問題となるのは、そのイデオロギーよりも新たな世界に対して提示されたイディオムの有効性なのである。従って、ローカルな宗教とキリスト教化との関係を理解するには、マクロな視点も、キリスト教との二項対立的図式に基づく「異教」という枠組みも無効であり、ローカルな個別事例に焦点を移行させる必要がある、と著者は主張する。

3

続く3つの章で、著者は20世紀前半の人類学者R.Redfieldの「大伝統」と「小伝統」の分析モデルを援用して、エジプト宗教に関して考察する。このモデルは、学識者によって組織される広大な思想体系である「大伝統」と農村社会において自生的に生み出される「小伝統」を、相互作用を軸に理解する為の分析装置である。

第2章Religion and Templesでは、神殿と民衆の小伝統的關係を、経済、社会、儀式等、多角的視点から検討する。豊穰祈願、農業サイクルと不可分のナイル信仰祭儀、治癒の場といったローカルな社会内における神殿の機能が列記されるが、ここで強調されるのは民衆の積極的な信仰参加である。3世紀の危機以降の神殿の衰退期に大規模な祭儀は史料に痕跡をとどめなくなるが、経済的要因のみを理由として社会生活に不可欠な要素が完全に消失するはずもなく、ローカルに密着した祭儀は持続する。この持続性を支えるためには、神殿に対する民衆の積極的参加が不可欠であった。ここでは、外来の様々な抑圧に対する反発、神殿に対する無償奉仕などの献身、祭儀に携わる信仰組合、奉納やパトロネジを通じた財政支援、といった様々な対応様式が史料から導き出されている。また、神殿側も民衆の需要に応える形で、祭儀を地域密着型へと変容させる一方、イコンの私的所有を通じ

て、祭儀を経ずにして神々へのアクセスを可能にする手段を提供するようになったという点も指摘されている。

第3章Local Scope of Religious Beliefでは、前章で扱った小伝統を孤立した現象としてではなく、大伝統とあわせて重層的に理解する必要が説かれている。この重層的関係は、実際には極めて複雑かつ多様であるが、著者の主張の要点は2つにまとめられる。第一に、ローカルな伝統は大伝統の要素を現地化する傾向が顕著であるということ。第二に、大伝統と小伝統の間には求心的傾向と分離的傾向が拮抗しており、中心からの分離的傾向が強まると表面上は伝統の衰退ともいえる現象が起こるが、実際にはローカルな領域や家庭内において宗教の持続性を保障する働きを持っている、ということである。前者の例としては、強い普遍性を有するヘレニズムの超越神格であるイシスが、地方においては「～のイシス」というローカル化された形態で信仰されていることによって示されている。ここからは、ヘレニズムのイディオムのローカル化が確認できる。また後者の例としては、小像や祭具等の家庭内への浸透が挙げられている。これらの考古学的史料の存在は信仰の中心である神殿と家庭との断絶ではなく、関係の強化を示していると理解するべきであり、神殿衰退期において信仰の持続性を支えていたことを示す、と述べられる。

第4章Mutation of the Egyptian Oracleでは、前章の分離傾向と相反する形で、王朝期から古代末期に至る様々な神託形態の歴史的変遷を追い、その求心傾向が示される。エジプト宗教の伝統的な神託は行進の際の神託を主形態として、ローカルな社会と神殿、神官との相互作用、社会秩序維持という機能を持っていた。ローマ期になると、新たな神託形態が生まれてくる。一つには、ローカル化と神官の積極的関与という前章までに考察してきた傾向が挙げられるが、その一方で、巡礼を通じた広域的な神託形態が存在したことは看過できない。とりわけ、新たに出現した予言書や地方予言者は、必ずしも神殿と敵対するものではないが、神託の場の拡散は不可避であった。かかる状況下において、3、4世紀に出現したキリスト教の聖人、隠者は、巡礼によって広域的に影響力を持つカリスマを確立することに成功する。ローカル化の進展によって伝統宗教の基盤が弱体化していた広域的な信仰に新たなイディオムを提供することで勢力基盤を築いたキリスト教は、神殿の代替機能を持つ教会や修道会における預言、秘蹟などを通じてローカルな領域にも浸透を開始する。ここにおいてキリスト教は様々な伝統宗教の様式を継承するという側面が見られる。キリスト教化の進行はイデオロギーの受容ではなく、広域的信仰のイディオム受容にはじまるというのが、著者の述べるところである。

4

続く2つの章で、著者は前キリスト教期における神官の変容とキリスト教への影響に関して詳述している。

第5章 Priest to Magician: Evolving Modes of Religious Authority では、祭儀執行者としての神官の変容について考察している。神殿衰退が顕著な3世紀の危機以降も、神官は祭儀の執行責任者として重要な社会的役割を保持し続ける。経済危機とキリスト教の伸張に直面した神官は、神殿主体の祭儀の執行者から、日常生活の問題に対応する事を志向したよりローカルな祭儀の執行者、すなわち、治癒者、占い師、魔術師とも言えるような形態への変容の道を辿る。祭式を定めた神殿の書を通じて伝統宗教との連続性を有するローカルな祭儀執行者たちの活躍は、人々の宗教的欲求に応える形で祭儀の多様化を招くことになった。多様な小規模祭儀形態は、ローカルな領域における競争関係を通じ、キリスト教にも色濃い影響を残すことになる。

これとは別に、「魔術の国」エジプトという外からの眼差しが存在した。このステレオタイプの表象は、ヘレニズム文化の強い影響下にあった神官にも作用し、特定の神殿に縛られない普遍性を志向した「導師」の出現を招くことになる。その結果、前述のローカル化した神官との二極化という現象が生じた。

第6章 The Scriptorium as Crucible of Religious Change では、文字文化と宗教変容の過程が考察対象となる。ローマ期の神殿書記は宗教書のギリシア語訳、解釈を通じて、文字文化に基づいた信仰の権威付けという機能を果たすが、そこには伝統的エジプトの文字文化とシンクレティズム的ヘレニズム世界の文字文化と、双方の影響が見られる。これは、伝統的祭儀に関する書の改訂という場面において、民族主義的心理とギリシア語使用、伝統の利用と同時代的プロパガンダといった両面性という形で表出する。3世紀のエジプト語を見てみると、ヒエログリフは実用性を離れて一種の芸術化が進み、デモティック（民衆文字）の使用が神殿書記の伝統として認められていたが、その一方で、文字メディアとしてのギリシア語は既に神殿にも浸透していた。このような土壌がコプト語を生むことになる。キリスト教会において最も発達をみるコプト語は、エジプト宗教の祭儀に関するテキストにおいて口語エジプト語がギリシア文字を用いて記述された例に由来するのである。また、魔術的意匠としての性格を得たヒエログリフの文字文化は、後のコプト教のアイコンにおける文字使用に大きな影響を与えることになる。キリスト教の到来によって伝統宗教の祭儀の独占は打破されるが、その文字文化に由来する祭儀の伝統はコプト語を通じてキリスト教に継承される、と著者は強調する。

5

本書の最終章となる第7章は、Idiom, Ideology, and Iconoclasm: a Prolegomenon to the Conversion of Egypt と題して、キリスト教化の過程を検討している。前章まで一貫して、古代末期においても伝統宗教は人々の宗教的欲求に応えるダイナミズムを有していたことが考察されてきた。それに加えて、伝統宗教への執着は、これまで古代末期の心性として理

解されてきた個人の救済志向ではなく、共同体での問題解決志向を示している。では、伝統宗教が維持されていたにもかかわらず、なにゆえ、そして、いかにしてキリスト教は受容されたのだろうか。

第一に著者が主張するのは、キリスト教が超越的な力をより効果的に提示したという点である。砂漠に隠棲する聖人は、神殿、神官、予言者等の伝統宗教が担ってきた各種機能を持つと同時に、巡礼を通じて広域的存在感を誇示する。彼らはキリスト教への導き手としての機能を果たす。さらに、文字文化と宗教の関係が緊密なエジプトにおいて、聖書を用いた祭儀執行はローカルな伝統宗教の代替を提示するのである。これにより新たなキリスト教のイデオムと伝統的イデオムの混淆が可能になる。もう一方で、重要とされるのは悪魔の存在の提示である。より広い世界を統べるキリスト教の唯一神との邂逅は、伝統的な神々の権威を損なうと同時に、恐怖の対象たる悪魔へと変質させる。このような二元論的世界観は危機の時代において、超越的な力と退魔機能を持つカリスマである聖人をより密接に結び付ける機能を果たす。

この聖人と悪魔の対抗関係という思想が現実化するのが、伝統宗教の排斥運動である。伝統的神殿や神像の破壊は古代末期の地中海世界全域で見られるが、この主たる担い手は異教禁止令を発する皇帝ではなく、むしろ教会勢力であり、修道士や俗信徒である。この行為は、悪魔祓いを意味する一方で、熱狂的破壊とその後の新たな秩序の開幕を象徴しており、そのドラマ性が熱狂と結束の宗教として自己演出するキリスト教を際立たせることになった。一時的な熱狂が過ぎ去ると、キリスト教は超越的な力へのアクセスを可能にするイデオムという伝統的宗教が果たしてきた機能に定着する事になる。著者はこの事象はローカルな文化の復元、勝利を示している、と結論付けている。

6

以上の概括から明らかなように、本書はそのタイトルが想起させるようなエジプト宗教の概説とも異なれば、同化／抵抗の二項対立的図式を用いた文化変容論とも一線を画す。史料に対する該博な知識に裏打ちされた、古代末期の宗教史研究への問題提起的著作として評価できる。参照事例はおおむねローマン・エジプトに限られているが、方法論、理論化に関する地に足の付いた考察は、この著作の射程を地域・時代を超えるものへと押し広げている。

特に出色の出来を誇るのは、1章の分析視座と続く3つの章の伝統宗教の持続、変容に関する理論的考察である。豊富な個別事例に関する論述を積み上げて形成される理論は、宗教を日常的実践の場において理解する新たな宗教理解をもたらすと同時に、伝統的慣行、イデオムの長期持続性と変容過程を明示することに成功している。この点は、豊富な事例を有するローマン・エジプト研究のまさに面目躍如といえる。このような考察を経た上

で導き出されるキリスト教の受容過程は、素朴な形で「キリスト教の勝利」という伝統的理解をもはや存立不可能にしていると言っても過言ではないように思える。ここでなされる考察が他地域においてどの程度有効であるかについてはさらなる議論が待たれるが、重要な叩き台となることは疑う余地がない。

このように刺激に富む本書であるが、その方法論と理論に関して、若干の疑問を感じる点がある。第一に、人類学の知見の利用法が挙げられる。理論面では、古典的なR.Redfieldの理論が史料に基づいた形で有効に機能している。だがその一方で、幾つかの論述の過程で見受けられる人類学のデータの利用方法は釈然としない印象を残す。例えば、家庭内における信仰が伝統宗教を維持する側面を指摘している3章139頁においては、現代の台湾、メキシコ、アフロ・アメリカンにおける人類学研究の成果が、比較材料としてではなく、史料の空白を埋めるものとして無批判に利用されるのである。これは、伝統的慣行はローカルな社会コンテクストの中においてのみ理解できるとする著者の理念と矛盾している。他学問領域の研究成果を有効に利用するにあたっては、その前段階として、コンテクストの類似性、相違性等を十分吟味する必要があるだろう。

第二に、キリスト教の受容過程に関する文化変容論にまつわる問題点が挙げられる。7章で論じられているとはいえ、なにゆえキリスト教が受容されたかに関する考察が十分とは言い難い面がある。この点に関して、A.D.Leeは著者がキリスト教の組織的強度に関する洞察を欠いていると批判している (*The Classical Review* 51, 2001, p.76.)。評者は古代末期宗教史を専門としてはおらず、有効な対抗理論を提示するにはいかにも勉強不足であるが、一つ有効と思われる方法を提案したい。それは、他の外来宗教の受容過程との比較である。本書の考察においては、伝統宗教の復元力とキリスト教の受容と双方を説明する必要があるため、外来宗教の現地化に関してはキリスト教に論述が集中してしまっている。このことは著者が克服すべきとする伝統宗教／キリスト教の二分法的理解を招く危険性と隣り合わせである。キリスト教以外の外来宗教がいかにして受容され、あるいは、受容されなかったのか。そして、伝統宗教とだけではなく、他の外来宗教と比較してキリスト教が持った優位性とはいかなるものであったかを考察することで、より有効な議論の提示が可能になるだろう。

論評を終えるにあたって、最後に宗教史とは離れたローマン・エジプト史全体から見て、本書の持ち得る意義を指摘しておく。本書で提示されている、イデオロムから理解する文化変容論は宗教生活に関しての考察にとどまらず、政治文化等の考察への適用も期待である。特に評者の主たる関心である、当時の人々がローマ帝国下の世界をいかなるものとして、いかにして理解していたか、という問題に関して、有益な視点を提供してくれるだろう。ローマン・エジプトの豊富な史料から導き出される現地化された多様なローマ帝国像は、ローマ帝国史理解に関して新たな光を投げかけるに違いない。